



## 信心の風光

お釈迦様がインドのルンビニーの花園でお生まれになったのは四月、親鸞聖人が生まれられたのは新緑の五月、この風薫る季節の光と風に、私たちに至り届けられた数かぎりない仏縁を尊く嬉しく感じます。

\* \* \*

一般社会では日常的に宗教が語られるとき、信心深い、信心がない、などと簡単に「信心」を使いますが、これほど目には見えず、形もなく、わかりにくいものはありません。自分の願い（欲）をかなえてもらうために神や仏に祈ること、お仏壇に毎朝水をあげているから、お位牌やお墓を熱心に拝んでいるからなどを、信心深いとしているのではないのでしょうか。

私たちは、ああなれば、こうなれば、ああしてほしい、こうしてほしい、と自分の思い通りになることばかり望んでいますが、一時思い通りになったとしても決して満足するものではなく、次から次へと思い通りにならないものが生まれるのが人間の性であることを知らなければなりません。そのことを気づかせるのが仏教です。

簡潔に言えば、「なるようにしかならない」と教えてくれるのです。それは決してただの諦めではありません。生まれ、育ち、学歴、肩書き、貧富の差はあっても、誰にも「お互いそうだったなあ」との思いを共有できるようになるのが、念仏者の御同朋御同行の世界です。

お念仏のみ教えは、仏法をきくということは自分をきくことであると教えます。では自分の何をきくのでしょうか。

親鸞聖人は我が身が「何の行も及びがたき身」であることに気づかれ、その思いを貫いて生きて私たちにお示し下さいました。

偉くなれ、賢くなれ、人に負けるな、何ごともやり通せ、と教えてきたのが今の世の中ですが、どれほど多くの人が、この言葉の呪縛に苦しんでいることでしょうか。今を賑わすエリートと呼ばれる人たちの犯した間違いも、この言葉に縛られたものかもしれません。せつかくの努力が実らない結果を生んでしまっているのです。

親鸞聖人は、「なれなれと言われても、なれぬではないか、なれぬところに帰れ」と言って下さるのです。それが「お念仏する」ということです。

これほど親切であたたかい言葉はありません。それでこそ皆が肩の力を抜いて、お任せしながら、楽に生きることができていくのではないのでしょうか。

ある聞法者は、「相変わらず、欲もおこり、愚痴もやむことはありません。いつもぶつかることばかりです。でも、仏法を聞かせてもらってるおかげでしようか、うろうろとぶつかってばかりおりますが、この頃は楽になってうろうろさせてもらっています」とおっしゃいます。

\* \* \*

今の社会では、自分が凡夫であるとの気づきのご縁が薄れ、自惚れが強く、自分を売り込むことをよしとする傾向が見られますが、一般の物差しで動いてしまっただけは、宗教の存在意味はありません。聞法者の信心は、深く大地に染みこんでいく、光と風のように周りに感じさせるものでありたいものです。

「人のいうことに なるほどそうかと うなずけたら そこにはなにか 小さな花が咲くようである」と、現代の妙好人榎本栄一氏は詠んでいます。凡夫をやめるのではなく、お互いが凡夫に帰る南無阿弥陀仏、それが私たちの得ることのできる信心なのです。 合掌

## 奏庵法座

日時  
4月26日(木)  
午前11時～

「真宗宗歌」  
正信偈  
法話  
ご文章拝読  
「恩徳讃」  
～\*～  
おとき

庵の庭は、肥えた土が流れてしまう崖がほとんどです。藤もツツジも、これから咲く紫陽花も、どれもみんな少し貧弱なのがこの奏庵らしいと愛でています。階段には山藤が散って竹の子が数本のび、新緑に包まれていて、お釈迦様と親鸞聖人ご誕生が偲ばれる季節です。

お出かけしやすくなりましたが、くれぐれも気をつけてゆっくりとお参り下さい。



## 日々の一句

NHKラジオ深夜便より

誰となき人なつかし  
おぼろ月

樽良

季語・朧月(三春)

この花に勿忘草といふ  
名あり

清崎敏朗

季語・勿忘草(晩春)

母の日や大方の母  
けふも疲れ

及川 貞

季語・母の日(初夏)

元気で  
病氣

いたしております  
大元気で

病氣

いたしております

\*

雨あり

晴あり

曇あり

すべて順調

\*

一切

任せるしかないのに

山本紹之介

「言葉の散歩道」より

連日聞かされるセクハラ、パワハラに騒動に、これが日本を代表する人の人に対する「認識」なのかと情けなくなる。品を語ったり、空気を読むということはしたくないと思っているが、彼らのあまりの品のなさ、時代の空気を読めないことには驚いてしまう。■人は誰も完璧ではなく、多かれ少なかれそれぞれの人間性に何か欠けているものだが、渦中の人たちにはその人格形成期に大切なものが欠落、抜け落ちているとしか思えない。この歳になるまでいるんな人と知り合い、語り合ってきて、中には何でも下ネタに結びつける輩もいて、居合わせる仲間で、頭の中覗いてみようかと笑うこともあったが、反感もかわず憎めなかったのは、権力の笠など知りもしない、ただのスケベに過ぎなかったからだ。■しかし彼れらは違う。日本中枢のエリートと呼ばれる地位を得るために努力し選ばれた人たちが、その人格形成過程において人と人との感情を知るということに割く時間を無駄なものとしてきていたとしたら、家庭教育、学校教育の根本の間違いを重く捉えなければならぬ。■ハラスメントとは、人を悩ますこと、傷つけること、優越した地位や立場を利用した嫌がらせのことだから、権力を目指す人間が陥りやすい傲慢を生み、あのような言動を生むのだろう。ハラスメントは相手あってのことだから、避けようとするれば避けられるじゃないかとの見方もあるだろうが、その温床が日本の社会には漫然とあるという事実を恥じなければならぬ。■人種、性別、学歴、肩書きなどで、貴賤や上下をつけるのは世界的に恥ずべきことだ。ましてやエリートと呼ばれたかったら、たとえ嘘でも、そのポーズを心していなければならぬ。大相撲の女人禁制も、扱いを平等にすれば解決ではない。その根底にある女性を「穢れ」とし、不幸が起こったらそれを救うことより優先して「災い」を「祓う」ために塩を撒く。それが根拠なき「差別」「脅し」であることを、もっと語られなければならない。第一「嫉妬して災いをもたらす」というようなものが神なのだろうか。 Norimaru